

キックオフ

情けは人のためにならず——昔の人は、そう言った。それについて、僕らの担任の先生は、こう教えてくれた。

「この諺の意味は、『余計な情けをかけると、それがかえってその人のためにならないことがある。ときには冷たくつっぱなすことも、社会のなかでは必要だ』ということですよ」ところが三日後、教頭先生がわざわざやってきて、こう訂正した。

「あの諺の本当の意味は、『困っている人に情けをかけて助けてあげれば、自分が困っているときには、誰かが助けてくれる。世の中は、そのような助けあいの精神で成り立っているのだから、情けは他人のためにかけるのではなく、自分のためにかけるのだと思って、どンドン人助けをなさい』ということですよ。よろしいか？」

僕個人としては、どっちの解釈でもかまわなかったし、クラスメートたちも同じ立場のようだったけれど、先生たちにとっては、これは大問題であったようだ。なぜなら、それから二週間ほどして、僕らの担任の先生が、学校を辞めてしまったのだから。

先生が消えたあと、僕たちのクラス内では三日間ほど冷戦状態が続き、密告者が囁き、スパイが放課後の体育館の裏でレポを書き、その結果、男子生徒が二人、ズボンで脱がされて校庭の池に放りこまれるという事件が発生した。

今度も教頭先生がやってきたけれど、僕たちは誰一人、口を割らなかった。しゃべれば、今度は自分がパンツまで脱がされて池に放りこまれる羽目になるとわかっているからだ。むろん、僕もしゃべらなかつた。一学年のアレン・ダラスを親友に持っている以上、キム・フィルビーにはなりたくない。結果的には、彼はいい目を見なかつたものね。

（僕は、ここんどちよつと、CIAの内幕ものつてヤツに凝ってるのだ。母さんに、「さあ、海外旅行に行くならあんたはどこがいい？」と訊かれたとき、「バージニア州ラングレー」と答えたのも、そのせいだった。バージニア州とカリフォルニア州の位置関係がわからない母さんは、僕が本場のビーチバレーを見がっているのだと解釈してた）

池に放りこまれた二人の罪状は、諺に関する担任の先生の解釈を、「曲解だ！」と、親に、ひいては教頭先生に告げ口した——というものだ。もつとも、僕らの担任の先生は、教科書に書いてあることをズケズケ批判したり、テストをせずにレポートだけで成績を付けたりするの、以前から、学校の上層部と対立していた人だったから、熟れた果実が落ちるように、今度の退職も、ただ単に「その時が訪れた」というだけのものだったのかも、しれないけれど、子供にはそんな理屈は通じない。いや、通じないふりをしてる。だって、

誰かを池に放りこむのはホントに面白いんだもの。

さて、この事件そのものは、これから僕が話そうとすることと、直接関わりがあるわけじゃない。ただ、あとになって振り返ってみると、あれは僕に、「情けはいつたい誰のためになるものか？」ということ深く考えさせてくれる出来事だった——と思ったので、ちよつぴり前ふりをしてみたんだ。

「情けなんてものは、この世にはないのさ」

僕の親友、一学年のアレン・ダレスである島崎俊彦は、銀ぶち眼鏡を光らせながら、そんな台詞を吐く。彼みたいな子供を持っていると、親はときどき——本当にときどき——そう思うかもしれない。腕のいい床屋さんである彼の親父さんは、島崎が正月の書き初めで「権謀術数」と書いたとき、彼の衿首をつかんで押入れに放りこんだそうだから。

でも、僕の意見はちよつと違う。これから話そうとしている出来事のなかで、僕はたしかにこの世の情けというものに触れたし、自分でそれを振つてもみた。

そう、振つたんだ。なぜなら、僕が出会った情けというヤツは、さいころの形をしていて、振つてみないことには、どの目が出るかわからなかったから。だから僕はさいころを振り、そして賭けた。

これはその、博打の顛末のお話。

前半戦

1

まず、最初に僕たちの家を訪れた、一人の男のことから話を始めよう。最初に引いた、特大のスピードのエースの話から。

その男は、福の神にしては人相が悪かった。宝船に乗ってもいなかった。彼がやって来たのは七月の六日、まだ梅雨もあけない、どんより曇った土曜日の午後のことだった。これも、福の神にふさわしい時節じゃない。

彼はまた、特徴のある赤ら顔をしてはいたけど、（実は、まるっきりの下戸だったので）酒の神でもなかった。でも、貧乏神にしては身形がよすぎたし、おまけにでつぷり太つてもいた。

ほかの何ものでもない、その男は弁護士だった。

「はあ……前川法律事務所ですか」

リビングのテーブルの上に載せられた名刺を、母さんは妙に真面目な顔でながめていた。無水なべや羽毛布団を売り付けにくるセールスマン以外の人間が、母さんにちゃんと名刺を差し出して挨拶をするなんて、ずいぶん久しぶりのことだと考えているみただった。昔はそうじゃなかったんだけどな——と考えるもいるようだった。母さん、昔は秘書をしてたそうだから。

母さんと父さんは結婚十五年目。二人の結婚式の記念写真を取り出すためには、先に、衣装ケースをふたつと、使われていないけれど捨てることもできない扇風機をひとつ、押入れから出さなければならぬ。しかるのちに、奥の壁におつつけられている押入れタンスのいちばん上の引き出しを開け、埃どナフタリンの匂いに目をしばしばさせながら、僕の赤ん坊のころの写真を集めたアルバムをどけて、やっと結婚写真に手が届く。

それまでのところ、僕の知っているかぎりでは、母さんがそんな手間のかかることをして写真をながめたという気配はなかった。それが良いことなのか悪いことなのかは、ちょっと判断を保留しておくけれど。

「それで、前川先生はわたしに御用があつていらしたわけですね？」

「さようでございます。あなたが緒方聡子さんに間違いないのなら」

「それは、間違いありませんわ」母さんは真面目な顔で答えた。

「しかし、ご主人にもご同席願いたいとお電話で申し上げておいたはずですが」

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。